



TITLE:

西[遊]夢録(十)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

---

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(十). 地球 1928, 10(1): 71-75

ISSUE DATE:

1928-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183460>

RIGHT:

## 西遊夢錄

(十)

### 瀧川規一

#### 蘇國の部

(XI) 蘇國の民謡とローマンス

蘇國の民謡の泉を汲まんとする者は必ず既述の O'Brien 教授の蒐集した民謡集を繙く。そのローマンスを知らんとするものは文豪スコットの筆になる詩や小説を閲讀する。

民謡中の大立物 Robin Hood は理想的な蘇國人を或る程度まで物語つて居る。人物が史實であるか否かは今更問ふ處でない。大英國人名辭典には Robin Hood と King Arthur が恰も史實として存在した人物であつたかのやうに他の史上の人々と共に列擧されてゐる。吾々が興味を感ずるのは史實に非らずして神話化された人物に現はれた性格である。King Arthur 及びそれに隸屬する騎士等の話がセルト族に起原を有するにしても今日吾々が知つてゐる King Arthur はブリトン族の想像力の産物である。従つて英蘭人の理想を或る程度まで表はしてゐるものと思はれる。Robin Hood はどうした譯か最初から浮浪の徒になつて居る。馬賊上りだと云つても差支へない程に素性得體の知れぬ豪傑である。然し彼があらはす性格を擧げるならば第一に人に接するや慇懃で、舉

措態度に癖がない。宗教心に富んで居り殊に聖母マリアを信奉してゐる。聖母を愛する心から凡ゆる婦人に對して恭敬である。徒黨を支へる爲めには上層階級を食物にしてゐる。僧正であらうが大僧正であらうが、修道院主であらうが、また貴族豪族や騎士であらうが、凡そ社會の上に立つ人間を食ひ物にする。然し農夫や自作農者には決して損害を加へない。一般に貧乏人に對して親切である。富者の者を奪つて貧者に分け與へる。勇敢にして優しい。貴族の如き氣品と態度と紳士らしき洗練さともつてゐる。諸種の冒險はその俠氣をあらはして如何にも蘇國人に好かれさうな處がある。King Arthur の物語に至つては封建時代の英雄の理想をあらはしたものであるから自然王者の資格を備へてゐる。王者として諸臣を臣服せしめる丈の魅力と偉力とを兼備してゐる。外敵を防ぐ力をもつと共に内訌を静めるに常に正義と賢明なる思慮ともつてゐる。英雄の出を賤にするのは支那風であるが、歐洲の傳説では英雄の出處を未知にしてゐる。或は一葉の扁舟に漂つてゐる赤ん坊が成人して不出世の英雄となつたり或は未知の魔手によつてなされた取り換へ兒が後に世を驚かす偉人であつたりする。Arthur と Robin Hood と Wile

land もまたその類である。アーサー王は臣下の服従を完全に得て後に諸方に遠征に出かける。敵を僅すや假借する處がない。今日英國の對外政策、殊に屬領に對する政策はこれを精密に點檢する時、彼らの理想とする傳説 Arthur 王の造り口に酷似してゐることを往々發見する。アングロサクソン族の勢力を占むる國若しこれに附加雷同する國の政策が Arthur 王の外敵に對する造り口と同じことを現實に繰り返してゐる。一篇のローマンスとして讀むうちに覺えず快惱の歎を洩らす者あらばその人は必ずや印度洋の航海を餘儀なくされて憤懣を體驗した者であらう。一面に無殘なる殺戮者たることを以て甘んじ自己の勢力を維持するが、他面には柔面であるアーサー王を連想する時容貌魁偉赤子を面習する人とは決して想はれない。優しきのある好愛すべき王様だと思はしめる無殘なる殺戮たることはアーサー王に圍繞する諸種の物語の集團を仔細に論理的に解剖して後に覺る讀者の推理である。斯くしてアーサー王は股肱の臣の忠勤をつなぐ王者の徳を備へてゐる。女性に對するや今日も猶英人特有の考をあらはしてゐる。既婚の男子が自己の妻君以外に如何なる婦人に對しても愛を感ずることは惡性の偽愛である。然しながら皇后 Guenever の場合に於て示さるゝが如く、今日の若き燕を咬へると等しく邪なる愛に陥つても女は恬としてその耻を知らない。臣下の粹者 Lancelot と道ならぬ戀に陥つても女王の罪は臣下の罪と同罪であり、道ならぬ戀を悔むよりも寧ろ道ならぬ戀の爲めに招來した不幸なる結果を悲んでゐる。こ

れが兩人の心的態度である。Lancelot の言ひ分にも面白い處がある。この騎士は武伎に於ては何人にも引をとなない懇懇なる禮儀を盡す點に於ても人後に落ちない。當時騎士等の風習として理想の婦人を心に抱きこれに身命を賭して傳づく、女性を理想の信奉の標的にするとは武士の風上に置けないと云ふのは東洋風の豪傑である。それは兎もあれ、當時の風習として騎士は婦人に對する理想愛を持たねばならぬ。従つて理想の婦人を女王に求め且つ見出すことは何の不思議がない。Lancelot は斯くの如くにして女王 Guenever に理想の婦人を見出したのである。女王に忠勤をばげみ、愛着心を抱いた點に於ては當時の騎士として何等疚しい處はない。寧ろ名譽なことであつた。而かも命を賭して理想の愛に殉じたのである。女王に對してはだから虚偽の惡性戀愛を抱いたのではない。然るに不幸にも女王の夫君たるアーサー王が居られて封建的な君王として彼を支配して居られる。彼 Lancelot の悔は女王に對する愛心の爲めに起るに非らずして君王に對して叛逆の地位に立つたことを歎き悔んだのである。Lancelot と云ふ典型的騎士にも斯うした懺があつた。この際女王を棄てるならば騎士として風上に立つことが出来なくなる。また一旦女王を解放する時には君王に反して戦ふよりも寧ろ如何なる屈辱も耐え忍ばんと決心した。この點がこの物語に意義を與へるのである。男子は戀愛に關して禁足され女子は解放される可能性を多分にあらはしてゐる點に於てもまた今日英蘭に於て見る女子の運動の實際を或る程度まで物

語つて居るのである。天人の羽衣を捨て返さじと頑張つて舞踊まで舞はした美保浦の漁夫のすべ腕もあることながら、Launcelot が女王に命がけの舞をまはし女王が騎士に命がけの舞をお互に舞はした點に於ては今日の若き燕以上の先例を示してゐる。美貌と才媛とをもつて誇る人妻が多くの青年の憧憬の的となつて得々然たることは極東の今日の世に珍らしくはない。あやつり、あやつらるゝプロセスが面白く、釣り上げられた魚には興味をもたない點に於て釣師の心理を物語る。英國十八世紀の Complete Angler の著者の如く小魚を釣る氣分は帝王の氣分に等しいとまで云はなくても、人魚を釣る氣分には吾々凡人や無資格者の知り得ぬ氣分があるのであらう。歐米の類風を今更に慨くのも野暮である。斯んな議論は渡歐前から考へてゐたことではあるが、今 Arthur's Seat の山の懸崖を跳び降りて思はる Guenever と Launcelot との取組を實見に及んだので、自然に想起するは靜かなる可き極東にも豫れ々々吹き及んだ西洋風である。この流行性感冒は何人を犠牲にし、何平方哩に蔓延するかは今猶未來の問題である。ダンスホールを閉鎖し醜聞を世に曝すのも斯うした處に源を發してゐるとは何人も氣づかぬであらう。アーサー・シートの山腹の跳躍がとんでもない論議となつたが、それは英國の弊風がまさか蘇國にまで及ぶまいと思つてゐたのに極東の旅行者をして啞然たらしめた爲めである。

## (XII) エナンバラの夏

### 西遊夢錄

エナンバラでは春三月になると、薫風の吹き初むる陽光に老若共に一陽來復の悦びを感じる。朝食をしたゝめる爲めに食堂に降りてはストーブの火に生溫かきを感じるのもこの三月である。窓を開け放つと庭には瘠さすの黒鳥の囀りを聞く郊外近くの家では野畑に焚く草木の煙しの香が吹く風に誘はれて流れて来る。市民は春季の衛生掃除の近寄ることを想ひ出す學童は春季休暇の遠からぬことを思つて悦ぶ。嬢等は春の衣裳の華かきを空想してゐるが如くに悦びの光を顔に充たす。人の話に聞くエナンバラの春は生憎見る機會を失したが倫敦の春とは大差がない。

四月に入ると驟雨が多い。晴れては降り、降つては晴れる。これも倫敦の四月に似てゐる。庭に直草が萌え出でる。樹木の枝葉が目も醒めるばかりの若緑である。微風に揺らぐ若葉を見て詩人は緑の囁きを聞くと云ふ。京は岡崎の二階から眺める神苑の杏の梢が若葉の囁きを耳に傳へるのと同じ心地である。この月には禽鳥も亦その囀をおのづと繁くする。然しながら伸び行く緑の葉にも、またばしやぐ小鳥にも時偶には試練の嵐が襲ふ。雪の交り電や霞の襲ひ来る不時の嵐がある。ために禽鳥も鳴りを静め、一度萌した木の葉も再び縮む目がある。花咲くすぐり (Currant) の葉の上には淡雪がとまり若緑の庭草の間に小さく慣まやかに頭を擡げ初めたクロカス (Crocus) の紅白や黄の花も雪に埋まる朝がある。さすが北國だけあつてエナンバラ市には四月に雪に見舞はれることが屢である。倫敦では四月に入つて雪を見ない。クロカスの花は三月になると既に草の間にその苔を見た。エ市の人々が、

『これでも今年雪は見納めですれ』と挨拶の辭とする頃には、今まで縮かんで居た筈の百草が一時に勢よく伸びて居る。陽光までが色と熱とを頗る増した心地がする。森林や公園には栗の樹がその廣い葉の掌を自由に擴げてゐる。屋壁にからまり纏ふ蔓草が吹く風に花の薫を送る。詩人の句を藉りて云へば、小鳥が樹々に轉づる日が訪れ、冬が暇を告げ夏の客が戸を叩くのである。邦人の口調をもつてすれば春鶯婉として轉り、くひなの叩く音のする頃となるのである。呉服屋の飾り窓には『春もの』の飾りを誇り、街上の敷石は日陽の暑熱と日陰の冷さともつて刻々移動の線を描く。知友の唇からは『風邪に罹りました』と云ひ『風邪に罹らぬやうに氣をおつけなさい』との親切な挨拶を交はされるのは斯うした時である。極東人は精確に意識して春と云ひ夏と云つて區別するが、英蘇兩國人は皆混同する。春と云へば冬の冷寒を凌ぎ來つた悦びを連想し、夏と云へば初夏漸く温味を感じる伸び／＼しさを想ふ。北に行けば行く程左様である。寒國では『夏來れり』を叫んで悦ぶ。

悦ばしい夏の初は五月の一日である。鯉鱈や武者人形を想ひ出すのは富士山の國の五月である。最近では貧乏國が富國を眞似てこの日には勞働騒ぎをする。社會の凡ゆる階級を通じて醒める必要のあるのは眞似事ではなくて自己の正體である。これに對する善處であり、眞似事ならぬ眞實である。英國の田舎では五月の一日は野外で舞踊の行はれる日である。小説や詩に喧傳される五月の竿立ちの舞はこの日に行はれる

のである。田舎地方の木地の儘の美人を認め得る日はこの日である。エ市では上述のアーサー・シートの山の上に若き男が踊り狂ふと云ふ。彼等は Robin Hood に扮し、小柄の John に裝うて互に擲擲ひながら練り歩いたので、この日は Robin Hood's Day 呼ばれてゐる。勢の赴く處斯うした勢力に充ち満ちた人々は荒々しくなり狼藉を演ずる。一旦は市の當局より禁止の命を受けたがそれも束の間、今日までその名残が絶えない。或時は日曜日に籠の鳥まで歌はしめないと努めたが、元來から無理な註文である。五月一日には既に朝の五時以前に山頂まで登る人々がある。八時頃には少くとも一千の人が登つてゐる。而かもそれには若い娘さん達が多數を占めてゐると云ふので驚く。太古 Paganism の日の神様 Baal の崇拜が遺つてゐるのだと推理するのは餘りに縁遠い朝食前に朝露に顔を洗ふこの人達のうちには時偶には八十歳を越した老紳士も居る。

五月の末にはエゲンバラの市に僧形の往來が頻繁になる日が来る。やがて筆者が訪問せんとする Holywood の宮殿をはじめ諸處の寺院では教派によつて會議がはじまる。これも一年中の行事である。市の人々が夏の休暇として他に出かける日が来る。早きは五月の初めに家をあける。學童を持つ家庭では學期の終りまで待つて七月に漸く轉地をする。住宅區域の家の窓には褐色の紙片をもつて内側から貼り紙をしてゐるさへ見出され、甚しきは戸口に板圍をしてゐるものさへある。蘇國を通じて夏の休暇日の旅出は盛に行はれる。夏のエ

ナンバラ市は城明け渡しの状態である。土地の人々は年來見馴れた顔がどこへやら見失ふ月は七月だと云ふ。その代り諸國からの旅人が入り込む。諸外國からの渡り鳥が跳躍を恣にする。ホテルと云ふホテルは満員である。店頭の商品が陳列換をする。旅行者向きのタータン(tartan)や Harris' tweeds の紋織や毛布や肩掛けやその他蘇國特産の毛織物、ニツカボツカの靴下や Tam o' Shanters の帽子までが誇り顔に店頭に並ぶ。或は繪葉書屋や案内書が綺麗を飾つて店頭を賑やかす蘇國産の寶石や銘入りのボタン類や蘇國豪族の紋章附きの品々が處狭まに陳列される。Princess street の目貫きの場處では黄昏時に化粧の者が異國の旅人に愁波を送る。Waverly steps から田舎見物の乗合自動車が出發する。異國の旅人が普通に見物する處丈けでも數が多い。

エ市の見物を一巡述べたのが順序であらう。普通人の見物す可き處を列擧するならば第一に Holyrood 及 Edinburgh Castle 次に Carlton Hill 及美術館(最後に John Knox の家と Robert Burns の止宿の家など枚擧に遑がない。乗合自動車に足を藉つて一度郊外に出づるならば、恐らく無盡蔵の史跡や文蹟に市を去る目のなきことを知るであらう。巴里も倫敦も夏は土着人と旅行者と入れ換りだと云ふ。エナンバラ市も亦それである。このお上りさんに加はつて悠々名所見物をするのも面白いことである。

## 新著紹介

新著紹介

### ○關東の地質

藤本治義編 菊版一四二頁 寫眞版七葉  
二百萬分一關東地方地質略圖附昭和三年四月 東京中興館發行 定價一圓三十錢

從來日本には地方的地質誌が一つもなかつた。日本地質學に就つて搖籃の地であり、近來其の真相が判りつゝあり且つ後來の研究地として價値の充分にある關東地方の地質は地學に興味を持つ誰れもが何時もアツプツデーの知識を保持して居ればならぬものである。然し多くの研究の論文はさう容易くは一般に消化しきれぬ所である。編者はこの丹澤山塊關東山地、足尾山地、八溝山脈、阿武隈高原、三浦半島、房總半島等を含む關東山地に關する論文百十餘を涉獵し且つ自身の親しく踏査された所を基礎としてこのよき地質誌を編まれたのである。其の内容の一斑を窺ふとよく諸學者の説を摘錄して原著者の意を尊重祖述し聊かも之を非議せず殆んど完全に諸説を序列されたのは編者の人格のゆかしさも忍ばれて嬉しい次第である。記事の中には地質圖、地圖、斷面等を豊富に挿入して理解を助くると共に野外の携行に便にされてある。近來の地質書にしてかくも眞面目にかくも手際よく編まれたものを見ないと云ひ得る。地學愛好者は何を措いても此の地質書を熟讀玩味し或は登山に或は遠足に之を携へて地學の眞髓を會得すべきである。(N)

### ○グラフ中心日本地理年鑑

山邊平助監修 三六版  
色版三四、附錄八八頁 昭和三年五月 東京學海指針社發行 定價七十五錢